

Kunio Maekawa Architects in Hirosaki

日本近代建築の巨匠
前川國男
建築を訪ねる

弘前

ル・コルビュジエと前川國男

フランス、パリのル・コルビュジエのアトリエには、建築を志す多くの人達が世界中から訪れました。前川國男もその一人でル・コルビュジエに師事し、坂倉準三、吉阪隆正とともに「日本の3大弟子」として、帰国後、日本の近代建築に大きな功績を残しています。

前川國男は昭和3年(1928)に東京帝国大学を卒業し、すぐにフランスへ留学。フランスのル・コルビュジエのアトリエに入る時に、叔父の佐藤尚武が国際連盟帝国事務局長としてパリに駐在していたため、前川の後見人として自宅に預かることになる。ル・コルビュジエのアトリエに入門した日本人建築家は1950年代末までに7人、日本近代建築史への影響はとても大きい。

前川は、ル・コルビュジエのアトリエで2年間修行、1920年代後半は、近代建築国際会議などの設立時期でもあり、アトリエには欧州各地から若手の建築家が集まり始めた頃でもあった。

昭和5年(1930)に帰国、日本に事務所があったアントニン・レーモンドのもとで働き、前川はこの期間、ル・コルビュジエとレーモンドから様々な影響を受ける。

レーモンドの事務所に入って間もなく、パリ在住の時に前川と親交があった木村隆三から、木村産業研究所の設計依頼を受ける。これが、前川國男の名前で実際に手がけた最初の建物となった。

その後の昭和10年(1935)10月1日に、自分の事務所を持ち、「モダンムーブメント」を日本に根付かせる活動を開始、近代建築国際会議に参加した建築家達とネットワークを構築し始める。戦時中の「上海華興商業銀行総合社宅(1942年)」や戦後の「晴海高層アパート(1958年)」などからもル・コルビュジエの影響を受けたことが読み取れる。

ル・コルビュジエは、1930年代に近代建築国際会議の主唱者として、世界の建築をリードし、いくつもの都市計



世界遺産に登録が決定した、ル・コルビュジエが基本設計した国立西洋美術館

画案を提示、20世紀を代表する建築家で20世紀以降の建築・デザインに多大な影響を与えた建築家である。

2016年、「ル・コルビュジエの建築作品～近代建築運動への顕著な貢献～」世界遺産登録が決定した国立西洋美術館は、ル・コルビュジエが基本設計を行い、「日本の3大弟子」と言われる前川國男、

坂倉準三、吉阪隆正の3人の弟子が実施設計を担当している。

前川は、日本全国に数々の建築作品を残し、昭和37年(1962)に、東京文化会館で、日本建築学会賞・朝日賞・BCS賞など数々の賞を受賞、昭和43年(1968)には近代建築の発展と貢献を讃えて、日本建築学会大賞も受賞している。

前川國男が残した建築物は、ル・コルビュジエの影響を受けつつ、弘前に遺された8つの建築物を見てもわかるとおり、建物が建つ敷地の風土・環境や使う人達への配慮がなされ今も生き続けている。

弘前を訪れたなら、是非前川建築を見て、触れて欲しい。



撮影者：廣田治雄



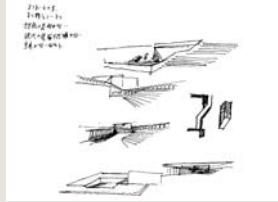
前川(左)とル・コルビュジエ(右)
提供：前川建築設計事務所



東京文化会館(1961年)



東京都美術館(1975年)



東京都美術館の前川國男素描
『前川國男－コスモスと方法』より

木村産業研究所

昭和7年(1932)竣工 前川國男27歳



フランスに留学後、ル・コルビュジエのもとで学び、帰国後手がけた前川國男最初の仕事。2年間のパリ留学の帰途の船上で、母方の父母と同郷の木村隆三の依頼により設計した。前川ガル・コルビュジエのモダニズムの理念を実現した記念すべき建物である。昭和10年(1935)に、ここを訪れたドイツの建築家ブルーノ・タウトが、著書『日本美の再発見』で、「コルビュジエ風の新しい白亜の建物」と記している。玄関吹き抜けの天井の鮮やかな赤色、踊り場の丸みをおびた空間、入口の縁取られた青いタイルなど、前川のこだわりが随所に感じられる。

平成15年(2003)6月 DOCOMOMO100選定、平成16年(2004) 国の登録有形文化財に登録。

- ① 1階の貴賓室のゆるやかなカーブを描くサッシュと丸い柱
② 1階トイレのドアノブのクリスタル
③ 竣工から10数年後、凍害により取り壊されたバルコニーが平成25年(2013)に復元



建築家

前川國男

チ博物館
(木村産業研究所2階)

前川建築作品群を愛する市民の手により、弘前と前川國男の関係を体験できる常設博物館が平成23年(2011)、完成。施設を体験することで、より多くの人に前川本人とその作品が親しまれるよう、弘前にある前川國男8建築作品の写真パネルや竣工当時の珍しい写真・模型のほか、前川処女作である、木村産業研究所の手書きの図面、年表など建築家前川國男作品の全容がわかる資料を展示している。

また、館内1階貴賓室は、当時の仕事の雰囲気や、空間の美しさを感じることができる。



2階には写真や模型などを展示



1階貴賓室には前川の当時の仕事の雰囲気を再現

弘前中央高等学校講堂

昭和29年(1954)竣工 前川國男49歳

木村産業研究所の木村隆三の兄、木村新吾がPTA会長をしていたことがきっかけとなり、弘前中央高等学校の創立50周年記念事業として設計を手がけた。前川國男、弘前での2つ目の仕事。全面がスチールサッシ、ガラス張りの正面からは、中のホワイエを見通すことが出来る。ホワイエは2階座席の階段状の構造がそのままホワイエ天井面に露出、白い壁と階段の手すりとの黒のコントラストが、シャープな美しさをみせている。白を基調とする内部、フレンチブルーに塗られた鋼板の外壁、軒裏の赤色など色彩の工夫が見事。後年、全国各地に設計される前川國男設計の音楽ホールのさきがけとなる建物である。平成16年(2004)10月から平成18年(2006)10月まで、丸2年計26回にわたり前川國男の建物を大切にする会の手により、803席の椅子が新しく甦った。

平成26年(2014) 弘前市景観重要建造物指定、平成26年(2014) DOCOMOMO184選に選定。



●住所：弘前市藏主町 7-1 ●TEL：0172-35-5000 (弘前中央高等学校) ●見学不可

弘前市庁舎(本館)

昭和33年(1958)竣工 前川國男53歳

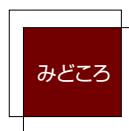
前川は、人体の骨格に相当する柱や梁は、力強さを表現できるコンクリートがよりよいとし、鉄筋コンクリート打ち放しの柱、外壁にはレンガブロックを積み、2階、4階は屋根が大きく張り出した建物となった。また城下町の風情を壊さないように、建物の高さは抑えられ、街との調和と気遣いが感じられる。

冬になると外壁や室内は雪に閉ざされる分、どうしても色彩が乏しくなるので、彩りを与えようと正面玄関の真上には群青色をほどこし、本館の階段壁面には、前川の好みだ赤い色が塗られ、ここに訪れた市民を楽しい気分にさせてくれる配慮がなされている。3階のロビーは、広々としたつくりで光が差し込み、開放的な空間となっている。

さくらまつり期間中には市庁舎の本館屋上から、弘前公園と岩木山が一望できる。

昭和47年(1972)には打ち込みタイルの新館が建てられ、平成28年(2016)新庁舎が完成、現在本館と新館の改修工事中である。

平成26年(2014)弘前市景観重要建造物指定、平成27年(2015)本館が国の登録有形文化財に登録。



- ① 竣工当時から変わらない緑色の壁面
- ② 赤くぬられた階段の壁面
- ③ 光が差し込む開放的な3階ロビー



●住所：弘前市上白銀町1-1 ●TEL：0172-35-1111(代表) ●見学申込：外観は見学自由

弘前市民会館

昭和39年(1964)竣工 前川國男59歳

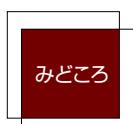
コンクリート打ち放しが周りの緑と溶け合い力強くも美しい。コンクリートの壁は外、内壁とともに独特の木目模様がくっきり現れている。ポーチの上は解放されたテラスで、前川はそこで西に岩木山を臨み、コーヒーを飲みたいと語ったという。約1300名収容の大ホールは前川の傑作とされる「神奈川県立図書館・音楽堂」にも引けを取らない音響を誇ると言われている。ホールの縦幕は棟方志功原画による。

2階へのゆったりした階段や西側のリズムを感じさせる四角い窓の並び。楽屋の赤いドア、銅管を使った2階のシャンデリアのきらめきなど館内細部への配慮が見られる。

開館から50年を迎える時に、大規模改修工事【平成24年(2012)～平成25年(2013)】が行われ、平成26年(2014)1月にリニューアルオープンした。

平成8年(1996) 第6回BELCA賞ロングライフ部門を受賞。

平成26年(2014)弘前市景観重要建造物指定。



- ① 楽屋入口の赤い扉
- ② 2階ホワイエのシャンデリア(銅管を使って作製)
- ③ 1階正面奥のおにぎり型の天井ライト



●住所：弘前市下白銀町1-6 ●TEL：0172-32-3374
●見学申込：要事前予約

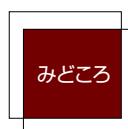


弘前市立病院

昭和46年(1971)竣工 前川國男66歳

昭和44年(1969)に全焼した旧弘前市立津軽病院の早急の建設を求められ依頼された建築物。外壁はコンクリート打ち放しで、木板の型枠のあとがコンクリートにはっきり写り、柔らかい印象を与える。竣工した時は、1階玄関横のアプローチに大きく張り出した庇が車寄せの機能を持ち、この建物の特徴となっていたが、増築した際、庇は取り壊され、増築した建物の1階部分が新しい庇となっている。木村産業研究所や市民会館など、今まで建築した建物の凍害を教訓に、なんとか凍害に負けない建物を挑戦したのが弘前市立病院である。窓を壁面よりも奥に配置することで、上部に庇を設けなくとも積雪への対策とした。フラットルーフは市民会館でも凍害が出ていて、前川は限界を感じていたが、患者のためにあえて、フラットルーフにして、利点を最大限に活用したと言う。

1階の吹き抜けの大ホールは明るく開放的で、白い壁や柱が美しく、患者への配慮がここに感じられる。



- ① 型枠に木板を用いていて、板の継ぎ目がそのまま残っているコンクリート面
- ② 竣工当時にあった大きな庇の跡が、今も玄関前に残っている
- ③ 壁面より奥に配置された窓



●弘前市大町 3-8-1 ●TEL : 0172-34-3211
●見学申込：医療施設のため、見学は外観のみでお願いいたします

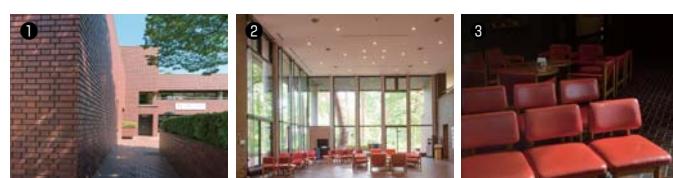
弘前市立博物館

昭和51年(1976)竣工 前川國男71歳

弘前公園内、外壁は深みのある赤茶色の打ち込みタイルで、周辺の環境によくとけ込んでいる。打ち込みタイルの外観は、隣接の市民会館の打ち放しコンクリートの外壁と対照的。文化庁の指導で公園内の樹木を1本も切らずに建築されたと言われている。中央のロビーは、天井まで伸びる大きなガラス窓で、室内からは、お城の檜が見えるように、外からは、館内で働く人の姿が見え、活気を感じられるようにと考えられている。開館当初から設置されている革製の朱色のソファーに座り、移り変わる公園の四季を眺めるのも楽しい。

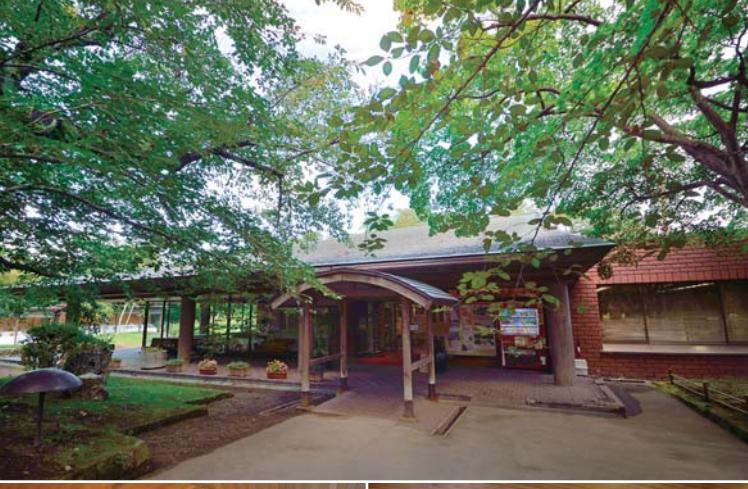
平成8年(1996)第6回BELCA賞ロングライフ部門を弘前市民会館と共に受賞。平成26年(2014)弘前市景観重要建造物指定。

- ① 前川独自の茶色い打ち込みタイルの外壁
- ② 大きなガラス窓で弘前公園の四季を感じられるロビー
- ③ 竣工当時からある、ロビーの椅子



●住所：弘前市下白銀町 1-6 ●TEL : 0172-35-0700
●見学申込：外観は見学自由ですが、館内は有料です





弘前市緑の相談所

昭和55年(1980)竣工 前川國男75歳

弘前公園の東側中央高校口近くに位置し、外観は公園の木々の高さを考慮し、高さを抑え、樹木に囲まれ溶け込むように建っている。前川建築では珍しい大胆な銅板の片流れの大屋根で覆われていて、L字型になっているのは日本一の幹周りのソメイヨシノを取り囲む工夫だったと言う。

正面は勾配がある屋根だが、後ろから見ると四角く見える。建物の前と後ろで、全く印象が違う外観をぜひ見比べて欲しい。吹き抜けのエントランスを入れると大きなガラス窓の開放的な空間が広がっていて、緑化に関する団体等により、展示室や休憩室として利用されている。

平成26年(2014)弘前市景観重要建造物指定。

みどころ

- ① 正面は勾配屋根だが、後ろから見ると四角く見える
- ② 周囲の植物との調和が見事
- ③ 桜の木を一本も切らずに設計



●住所：弘前市下白銀町1-1 ●TEL：0172-33-8739
●見学申込：なし（自由に見学可能）

弘前市斎場

昭和58年(1983)竣工 前川國男78歳

後方には岩木山、スギ林とリンゴ畠の中に、重厚でありながら回りの景観にとけ込み、ひっそりと佇んでいる。玄関上を見上げると、天井はダイナミックなコンクリート格子梁で、訪れる人のあらゆる感情を受け入れるようである。

建物の外壁は打ち込みタイル。故人が茶毬(だび)に臥される間、遺族らが待つ和室は、炉室と長い緩やかなスロープの渡り廊下で繋がっていて、この渡り廊下は、黄泉の国と俗世を結ぶ、古事記由来の黄泉平坂(よもつひらさか)をイメージしていると言う。斎場の竣工式には、前川は奥さんを伴って出席、それが前川の最後の来弘となる。斎場は晩年の作であり、弘前での最後の作品となった。

平成22年(2010)JIA25年賞大賞受賞、平成26年(2014)弘前市景観重要建造物指定。

みどころ

- ① 和室へと移る渡り廊下天井のゆるやかな優しいカーブ
- ② 玄関車寄せ天井のコンクリート格子梁
- ③ 収骨室の天井のライトは、魂をお山に返すという考え方から、岩木山の方に光が抜けるように計算されている



●住所：弘前市常盤坂2-20-1 ●TEL：0172-32-0643
●見学申込：見学は基本的に16:15~17:00の間にお願いします。
事前に必ず電話で許可を得てください

建築家 前川國男と 弘前の建築物【仲邑孔一】



前川國男が昭和61年(1986)、81才で亡くなつて、没後30年。前川國男との思い出が残る仲邑氏へ、前川國男の印象や一緒に手がけた建築物のことを伺いました。仲邑さんの言葉から、前川國男をもつと身近に感じることができます。

前川國男は新潟出身とされているが、津軽の人は「弘前の人、おらほの建築家」と強く思っている。それは、前川の母の先祖が弘前藩の重臣で、妹は五所川原の富豪「布嘉」に嫁ぎ津軽との関係が深いからである。伯父の佐藤尚武は参議院議長、国際連盟帝国事務局長を歴任した人物。両親は弘前で結婚した後、新潟へ転居、明治38年(1905)5月14日に前川は生れた。ちなみに、弟の「春男」は後に、日銀総裁となる人物である。前川は、「あまり弘前に行つたことはなかったよ」と、弘前との関わりが薄いよううに言っていたが、子供のころは親戚の人が来る度に奥の部屋に押し込められ、禊ごしに津軽弁をきいて、津軽の人々に興味を持ち「母方の郷」として大切に思っていたようだ。

学生時代に、フランス語を独学。建築雑誌で初めて目にしたル・コルビュジエの建築に驚き、感動を受けパリに留学することになる。当時のパリには佐藤尚武が国際連盟帝国事務局長として在任していて、伯父の世話になることで親戚一同から留学を許された。時を同じにして、弘前の木村隆三も大使館付武官としてパリに在住しており、佐藤を通じて、二人は意気投合、昼はコルビュジエ、夜はバレエやオペラ……夢のようであったと言っていた。そんな近代建築の巨匠 前川國男の、それぞれの時代を映す「ほんもの」8つの作品が弘前に残された。どの建築物も今も現役である。時代とともに移り変わる前川の8つの作品を考察しよう。

昭和7年(1932)木村産業研究所竣工。処女作である。木村隆三は祖父 静幽の遺言で事業を託され、前川に「戻つたら俺のところ設計してくれ」と依頼。木村産業研究所の設計料の半分を勤務先のレイモンドに差出し、自由な時間と場所を確保し設計に専念。真っ黒な武家屋敷の街中に突然現れた真っ白で豆腐型の建物、横長窓とピロティがついた「洒落た、さわ



仲邑 孔一(なかむら よしかず)
昭和11年(1936)、東京生まれ。
昭和63年(1988)、明治大学建築学科
卒業後、前川建築設計事務所入所。設計・
コンペの模型、スタディ模型を多く手がけ、35年間に渡り弘前市の仕事を担当。
東京都在住。

やかな空間」に市民が皆驚いた。それから20数年後、昭和29年(1954)、県立弘前中央高校が竣工。子供達に若いうちから本物の劇場を経験させることも大事、と考えたこともこの講堂設計に役立っている。

昭和33年(1958)弘前市の仕事が始まる。当時の藤森市長は市庁舎の設計者に作風に津軽を感じた前川を選定した。「津軽十万石にふさわしい…」、堂々と大庇のある打ち放しの躯体で表現する。昭和39年(1964)良い環境の城内に市民会館、オーディトリアムは前川が特に興味を持つ。本格的なホールを目指し「田舎のホールなのに吃驚するほど一流」に、意地を見せた。

打ち放しの時代は先が見えてきた。公害が進みコンクリートは汚れ傷んだ。それでも豊かになり炻器質のタイルブロックを着せても似合う様になった。丈夫さと美しさを得た。

昭和47年(1972)市庁舎新館から打ち込みタイルを使用。前川は「東京と同じタイルかい、なにかが違うね」と気がつく。凍害防止に焼き締め、吟味し美しくなっていた。博物館、緑の相談所は環境と人にも優しく安心できる建物。

昭和58年(1983)、弘前市斎場を竣工。前川が「死」が嫌いなのは普段からわかっていただ。自分の「死」を考えてしまうと設計は止まってしまう。今の幸せからどこへ行くの。他人の「死」、悲しみも弔いも、しきたりも自然に包まれる。前川の建物を大切にする会のメンバーでも前川に会った人はいない。でも前川の建築が大好き。

「こんなに建築家の尊厳を認めてくれた施主はなかつた。」「こんなに仕事するなら分室作ればよかったね、弘前は良い仕事。パートナーとして認める。自分名で発表しない。」と前川は言った。

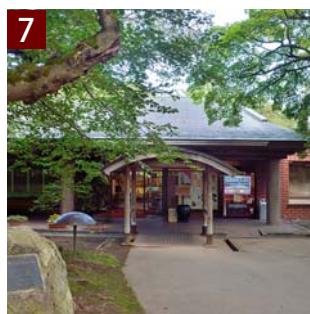
弘前市斎場 ミド同人 仲邑孔一+前川國男
協 力 前川建築設計事務所



自然に囲まれた弘前市斎場



弘前の前川國男建築 周辺案内図



発行：(公社)弘前観光コンベンション協会

取材協力：前川建築設計事務所、仲邑孔一氏、木村文丸氏、前川國男の建物を大切にする会

参考資料：山名善之著『ル・コルビュジエの弟子たちによる展開』

ル・コルビュジエ×日本(国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に)冊子「国立近現代建築資料館」発行

※各施設のみどころについては、前川國男の建物を大切にする会の「みどころマップ」を参考にしています。